



心にも頭にも、そしてお腹にもおみやげいっぱい詰め込みました。また行きたい!



# “愛すべき小さな田舎” からの小さなたより

第17回

## 東北、南三陸町を訪問 その2：タコとの帰宅(笑)

星ふる学校「くまの木」

(特定非営利活動法人 くまの木 里の暮らし)

加納 麻紀子

### 前

号に続いて、しおやグリーンツーリズム推進協議会の視察研修で訪ねた宮城県南三陸町のことを記したい。

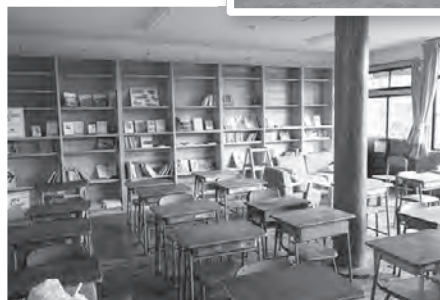
オクトパス君の製作・販売を行っている「入谷YES工房」を後にしたわたしたちが向かったのは、「校舎の宿さんさん館」(以下、さんさん館)。その名の通りこちらも廃校となった小学校を活用した宿泊施設で、農業体験、林業体験、地元食の調理体験なども楽しめる。さんさん館のオープンは平成十三年四月一日。実は、わたしが現在勤務している星ふる学校「くまの木」の立ち上げにあたって、当時、検討に携わっていた方々が、先進事例調査として同年八月にここを訪れた記録がある。くまの木がお手本にした先輩施設が、あの震災を乗り越え元気に運営を続けている！廃校活用仲間を訪ねるときはいつも胸が高鳴るが、今回はまた特別だ。

到着後、早速夕食をいただく。カキフライにお刺身、ワカメ、ヒジキ、みそ汁のフオリ——新鮮な海の幸が旅気分を盛り上げてくれる。一方で、同様の施設運営を行っている者としては、食事提供は何人くらいでどういう役割分担なのかしら、厨房はどんなレイアウトなのかな、小さい食器が多いと洗い物も大変だろうな、シフトはどんなふうに組んでいるんだろう……と、あれこれ気になってそわそわしてしまう。

夕食をおいしくいただいた後、事務室におしかけ、スタッフの阿部あい子さんにお話をうかがった。さんさん館に生まれ変わった旧林際小学校の校舎は、閉校後解体されることになっていたそう。しかし、地元



林際小学校という名前になるほど、と納得。南向き校舎の北側に山(裏山)という配置に見慣れているので、このロケーションはなかなか新鮮でした。正面玄関の上にある時計は14時46分を指していました。



昔の教室の雰囲気がありながら、でもすっきりと整えられた研修室。うしろは、「かもしか文庫」というミニ図書館になっています。もっとゆつくりしていきいたいなあとも名残惜しい気持ちでした。

の卒業生二人が地域に根差した活動拠点としてここを残そうと町にはたらきかけたのがさんさん館事始め。その二人で立ち上げた旧林際小学校運営事業組合が校舎の無償譲渡を受け、改修工事を経て、事業を開始、現在も同組合で運営を行っている。地域は違っても地元の小学校への思いは同じ。二〇年ほど前に塩谷町から先進事例調査に訪れたメンバーも、そんな話を聞いてさぞ奮い立ったことだろう。さんさん館もくまの木と同じように団体利用が多いのかなと思っていたが、テント泊や車中泊、個人旅行や海外からのお客様もあるという。「無理はしない、身の丈に合った運営で」とおっしゃる阿部さんだが、お話の端々からはさまざまなお客様のニーズをアンテナ高く汲み取って対



阿部民子さん。お話をうかがって海の恵みにも山の恵みにも、そしてそれを育み届けてくださる方々にも改めて感謝の念がわきました。続いてきたもの、守るもの、変えていくこと、水産業の働き方改革(!?)のお話もとても興味深かったです。

普段食卓ではなかなか主役になることのない“海藻”にこんなふうスポットライトを当てることができるんだ、とまさに目からうろこ。最後はほかほかご飯で試食です。おいしかった!



応されていることがうかがえる。それがお客様の広がりにつながっているんだらうなと感じた。東日本大震災の後、さんさん館はしばらく警察署の仕事場となっていたそうだ。その後、宿泊施設として再開すると、町を訪れるたくさんの方のボランティアさんたちがここに泊まったという。遠く首都圏の方もりピーターとなり、さらにそれぞれの地元でPRをしてくれて、また新たなお客様につながる。そんな循環が生まれるのも、地元の方が思いをこめて大切にしている施設だからこそ、阿部さんをはじめとするスタッフのみなさんの対応があつてこそだろう。運営の実務などについても根掘り葉掘りうかがったが、阿部さん、どんなことにもこともなげに涼しい顔で答えてくださった。わたし

は、さすが先輩施設！とひそかに羨望のまなざしを向け、またくまの木の運営への思いを新たにしたい。

翌日は、ラムサール条約登録湿地・志津川湾に面する南三陸・海のパッケージセンターへ。視察研修の行程表には「ふりかけ作り体験」とあり、いくぶん気軽な気持ちでいたのだが、知っているようで知らない海藻についてのあれこれや、この地域での水産業と日々の暮らしのこと、そして東日本大震災のこと、震災後の自然の再生、そして仕事と暮らしの再出発のことなども学べる海藻ふりかけ作りは、そこにいるみんながじーんとし、あたたいものがその場に満ちる本当に素敵な体験だった。これは「たみこの海パック」という海産物の通信販売を手掛けている阿部民子さんによるプログラム。まだ新しいパッケージセンターのこぎれいな実習室に現れたたみこさんは、みんなが大好きな小学校の先生(低学年担当)という印象で、正直言つてわたしはちょっとびつくりした。厳しい自然を相手にする海の仕事にかかわる方だから豪快でざつぱらんで厳しいけれど人情味があつて……なんていう雰囲気を手元に想像していたのだ。かわいい手描きのイラストを示しながらのたみこさんの説明は、とても聞きやすくわかりやすい。わたしたちの想像が及ばないほどの厳しい状況だったときの様子も、感情に流されることなく、それでも思ひはしっかりと伝わってくるお話しばかりで、なんというかとてもさわやかだった。わたしは大いに感銘を受け、現場の方に直接お話をうかがうことの意義深さに改めて感じ入った。

文字通りの「ふりかけ作り」の部分は、いくつかの

海藻を好みの配合でブレンドしてふりかけをつくるというもの。香りをかいでみたり、袋に入れてシャカシャカ混ぜ合わせたりと誰にでもやりやすく楽しめる工夫がされていて、一回わいわいとにぎやかにオリジナルふりかけを完成させた。たみこさんのお話の具体的な内容はここには書かない。ぜひたみこさんのプログラムを実際に体験していただければと思う。日本で初めてのASC(水産養殖管理協議会)漁業認証取得につながる、震災前後の漁師さんたちの考え方の変化もリアルにうかがうことができる。

そして、南三陸町訪問のラストはやっぱり、南三陸さんさん商店街！海なし県に帰る一行は、とても持ち帰り配送にするほどたくさんのお土産を買った。小さなマイクロバスは充実感でいっぱい。二〇一三年の訪問時には二〇枚も撮れなかった写真が、今回は二〇〇枚。ふと、このメンバー全員のカバンの中に、あの小さくもずっしり重く真っ赤な「ゆめ多幸鎮オクトパス君」がいるんだなあ、と思うとなんだか可笑しくなった。

みんなでたみこさんと記念撮影。今回、しおやGTのみなさんと一緒に南三陸を訪ね、この体験を共有できたことがわたしにとって一番の収穫かも。

